

目指す学校像	・笑顔と希望のあふれる学校 ・安心・安全な学校
重点目標	1 情報端末の有効活用、主体的・対話的で深い学びにつながる授業実践の推進 2 安心・安全な学校に向けた、子どもに寄り添う生徒指導・教育相談の充実 3 地域の一員として自分にできることを考え、行動できる児童の育成 4 主体的に学び続ける教職員の育成

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成	（8割以上）
	B	概ね達成	（6割以上）
	C	変化の兆し	（4割以上）
	D	不十分	（4割未満）

学 校 自 己 評 価		年 度 評 価		学校運営協議会による評価				
年 度 目 標		年 度 評 価		実施日令和7年3月5日				
番 号	現 状 と 課 題	評 価 項 目	具 体 的 な 方 策	方 策 の 評 価 指 標	評 価 項 目 の 達 成 状 況	達 成 度	次 年 度 へ の 課 題 と 改 善 策	学 校 運 営 協 議 会 か ら の 意 見 ・ 要 望 ・ 評 価 等
1	〈現状〉 ○基礎的・基本的な学力は概ね定着しており、さいたま市学習状況調査では、市の平均正答率を上回っている。 ○よい授業をつくるための基本的な授業の進め方について、全教職員の共通理解が図られている。 〈課題〉 ○ICT の活用について、全教職員が無理なく学ぶことができる環境づくりが課題である。 ○さいたま市学習状況調査の「主体的で対話的で深い学び」「自宅での学習」に関する質問では、市と比較して肯定的な回答が少なかった。	基礎学力の定着に向けた授業改善	1 主体的で対話的で深い学びにつながる授業実践について、学校研修において組織的に行う。 2 学校と家庭が連携した基礎学力の定着に繋がる環境整備の実践。 3 副担任やスクールアシスタントの配置により、個に応じた丁寧な学習指導や支援を実施する。	1 学校評価「研修の成果は、日々の教育活動に生かすことができている」教職員の A 評価が 50%以上となったか。（昨年度 23%） 2 3 学校評価「授業が分かる」児童 A 評価が 68%以上となったか。（昨年度 63%）	1 学校評価「研修の成果（話の聞き方・自分の考えを伝える力）」教職員 A 評価は 40%で昨年度を上回ったが、目標値には届かなかった。 1 主体的で対話的で深い学びにつながる授業について、学校研修において組織的に行うことができた。 2 3 学校評価「授業が分かる」児童 A 評価は 62%で、目標値には届かなかった。 3 SA（スクールアシスタント）と副担任を各学年の状況により重点的に配置し、丁寧な支援を実施した。	B	・校内研修を組織的に行い、学び方改革・教え方改革を推進する。 ・学校だよりや懇談会等を通して、児童が家庭学習や宿題を自主的に行うことができるよう、保護者の方に声掛けや見守りをお願いする。 ・SA（スクールアシスタント）と副担任を各学年の状況により重点的に配置する。	・新学習指導要領になって、毎年課題を明確にして取り組んでいる成果が出ている。 ・授業参観をした際に、児童が調べ、発表し、交流していた。一方的ではなく、双方向から、プレゼンテーション的な形で、児童が主体的に学んでいた。 ・児童が家庭学習や自主学習に取り組めるように、保護者としても、子どもに勉強する意味・目的を伝えていきたい。 ・学童で宿題をしたとしても、家庭でも見取ってもらうように声をかけている。
		学びの自律化に向けたタブレットの積極的な活用	1 タブレット端末の効果的な活用に向けた、定期的または自主的な校内研修を年 5 回以上実施する。	1 学校評価「タブレット端末の効果的な活用」教職員評価の肯定的な回答が 90%以上となったか。（昨年度 81%）	1 学校評価「タブレット端末の効果的な活用」教職員の肯定的な回答は 92%で、目標値を上回った。 1 タブレット端末の効果的な活用に向け、校内で自主研修を 5 回実施した。	B	・校内研修に「タブレットの効果的な活用」を位置付け、組織的に取り組む。 ・自主研修をより多く実践できるよう、声掛けや意識改革を進めていく。	・授業の様子を参観すると、タブレットへの抵抗はないのではないかと。教職員の組織的・自主的な各種研修が数値的な向上にもつながったのではないかと。 ・学童では、タブレットの通信環境は限られているので、できない場合もある。
2	〈現状〉 ○学校評価「学校は楽しい」の質問に肯定的な回答をした児童は 94%であり、前年度より 1%向上している。 ○学校が安心・安全で居心地の良い場になるよう、児童一人ひとりに寄り添った生徒指導・教育相談体制に向けて取り組むことができている。 〈課題〉 ○昨年度は、大きな事故等は起きていないが、多くの危険な事案は報告されている。安全指導については、家庭や地域の協力のもと、年間を通して組織的で継続的な指導の必要性がある。 ○防犯システムの強化のため、校内施錠開錠システムの改訂が必要である。	児童一人ひとりを大切にした指導体制の構築	1 児童一人ひとりに寄り添った、組織的な生徒指導・教育相談体制を構築する。 2 校長講話や学校だよりで、「あいさつの大切さ」「心を潤す 4 つの言葉」「心を元気にする 4 つの言葉」等について取り上げる。 3 「善悪の判断を正しく行う」「いじめをしない、許さない」児童の育成のため、発達支持的生徒指導を校内指導体制の核とする。	1 学校評価「学校は楽しい」児童の肯定的な回答が 97%以上となったか。（昨年度 94%） 2 校長講話や学校だよりで、あいさつや言葉の大切さ等について取り上げたか。 3 学校評価「友達となかよく」教職員・保護者・児童の A 評価を昨年比各 5%上げる。（昨年度 29%・53%・76%）	1 学校評価「学校は楽しい」児童の肯定的評価は 89%で、目標値には届かなかった。 1 Sola る一むや空き教室など児童が安心して過ごせる場所を用意し、個に応じた対応をすることができた。 2 校長講話や学校だよりで、あいさつや言葉の大切さ等について取り上げた。 3 学校評価「友達となかよく」の A 評価は、教職員 48%・保護者 44%・児童 72%で、教職員は目標値を上回ったが、保護者・児童は目標値には届かなかった。 3 発達支持的生徒指導について職員集会で説明し、児童対応の際の核とした。	B	・発達支持的生徒指導を校内指導体制の核とし、一人ひとりの実態に寄り添った丁寧な対応を、全教職員で組織的に行う。 ・不登校児童支援については、該当児童への個別の対応に加え、校内教育支援センター（Sola る一む）や不登校等児童生徒支援センター（Growth）等を活用し、教育委員会や関係機関と連携し、全児童が学べる環境を保障する。 ・保護者や地域の方々にもお願いし、児童自らあいさつをしたり、正しい言葉遣いを意識したりできるように、粘り強く指導を続ける。	・児童や家庭の多様化が見られる中で、個に応じた支援が引き続き必要である。 ・市内で Sola る一むの支援方法の中に、PTA 等が協力している学校もある。今後とも自校に合った体制づくりを研究していくのもよいのではないかと。
		児童にとって安心・安全な学校環境の構築	1 毎月の安全点検、定期的な校内巡視の実施。修繕が必要な場合は、速やかに業者へ依頼する。 2 施錠開錠マニュアルの改訂、防犯教室・不審者対応研修・交通安全教室の実施。 3 事故防止や不審者対応について、学校だよりや学校安心メール、登下校における声かけ等で、児童や保護者、地域の方へ周知をする。	1 安全点検における修繕要望箇所の修繕率は 93%以上にする。（昨年度 91%） 2 3 学校評価「事故防止」教職員の A 評価 60%以上にする。（昨年度 45%）	1 安全点検における修繕要望箇所の修繕率は 70%で、目標値には達しなかった。 2 防犯システムの強化のために、施錠マニュアルの改訂を行った。 2 3 学校評価「事故防止（健康・衛生・安全）」教職員 A 評価は 56%で昨年度を上回ったが、目標値には届かなかった。 3 事故防止や不審者対応のために、学校だよりや学校安心メール、登下校における声掛け等を行った。	B	・毎月の安全点検、定期的な校内巡視により、危険な箇所を速やかに発見する。また、より多くの箇所に対応できるように、安全面に配慮した予算の重点化を行う。 ・登下校時の児童の見守り体制の維持・強化のため、PTA や地域の方々と連携し、より良い体制づくりについて協議を重ねる。 ・児童の安全に配慮し、校内の防犯システムの見直しを毎学期行う。	・修繕は、さいたま市の予算によるので、学校だけで対応できるものではないが、できるところを重点的に執行している。 ・見守り体制については、それぞれの立場で諸課題を抱えている。相互間での実態把握や合意形成がなされる機会・場は必要ではないかと。 ・この 2、3 年は、夏の巡回活動を重点的に実施してきた。自治会としても子どもを巻き込んだ新たな取組を模索中である。
3	〈現状〉 ○「自らあいさつができる児童の育成」が、文蔵地区の最重要課題の 1 つであり、令和 6 年度も学校や家庭、地域で一体となって取り組むこととなっている。 ○年 3 回の学校運営協議会での熟議を踏まえた学校運営ができている。 ○学校だよりや学校安心メール等により、定期的に保護者や地域の方々に情報提供ができている。 〈課題〉 ○地域との関わりの中で、「地域の一員として自分にできることを考え、行動できる」児童の育成が課題である。 ○「自ら」あいさつする児童が依然として少なく、保護者や地域の方々と一体となった、あいさつ運動の推進が課題である。	学校・家庭・地域との連携	1 児童や保護者、地域の方に対しての積極的なあいさつや声かけを実施する。 2 児童と地域の方々との多世代交流ができる行事を紹介したり、新たな機会を設定したりする。 3 学校運営協議会において、児童と地域の方々が話し合う場を設定し、課題解決のための取組を実践する。	1 学校評価「あいさつ」に関する教職員・保護者・児童の肯定的評価が昨年度比各 3%上がったか。（昨年度 71%・71%・83%） 2 児童が地域の方々との多世代交流ができる機会を設定する。 3 学校運営協議会における児童と地域の方々との話し合いの充実のため、児童の参加人数や時間、テーマについて再検討する。	1 学校評価「あいさつ」の肯定的評価は、教職員 92%・保護者 93%・児童 90%で、教職員は目標値を上回ったが、保護者・児童は目標値には届かなかった。 2 PTA 主催で文蔵まつりを実施し、学校側も支援することにより、児童と地域の人々との交流する場を提供することができた。 3 学校運営協議会において、児童と地域の方々が話し合う場を 2 回設定し、地域の課題について意見を交流することができた。	A	・「自らあいさつができる児童の育成」を文蔵地区の最重要課題の 1 つとし、令和 7 年度も学校や家庭、地域で一体となって取り組む。 ・文蔵小まつりの開催方法について、PTA や地域の方々と協議し、児童が保護者や地域の方々との多世代交流をし、地域形成の一員として活躍できるようにする。 ・学校運営協議会における児童と地域の方々の話し合いでの決定事項を、具体的な実践へと繋げるようにする。	・あいさつの実情との乖離は感じる。自分からあいさつできる児童が 1/3、あいさつされるとできる児童が 1/3、あいさつができない児童が 1/3 位ではないかと。 ・感謝の会やお手紙に感激した。児童との交流は、大人側が元気をもらえる。 ・自転車の運転のマナーが守られていない大人がいる。歩行者優先を理解してほしい。
		保護者・地域への情報提供	1 校長講話や学校だよりで、「学校運営協議会」や「文蔵の地域」に関することを取り上げる。 2 学校運営協議会や防犯ボランティアの方々を紹介したり、感謝を伝えたりする新たな取組を実践する。	1 学校評価「地域への関心」教職員・保護者・児童の肯定的評価を昨年比各 3%上げる。（昨年度 71%・71%・83%） 2 学校と関わりが深い地域の方々を紹介する新たな取組を 1 つ以上実践する。	1 学校評価「地域への関心」の肯定的評価は、教職員 72%・保護者 41%・児童 72%で、目標値には届かなかった。 1 学校だよりで浦和祭や避難訓練、あいさつ運動など、地域と関わりのあることを取り上げた。 2 学校運営協議会における 6 年生児童との交流やお世話になった地域の方々への手紙を渡す等の取組を実践した。	B	・学校の情報を地域の方々に広く周知するため、地域の実態を考慮し、手紙を回覧したり、学校安心メールやホームページ等を活用したり、周知方法を工夫改善していく。 ・学校運営協議会や防犯ボランティアの方々一人ひとりを、児童や保護者により知ってもらうために、学校だよりで紹介したり、校内で掲示したりするなど、新たな取組を実践する。	・シルバー人材センター等関係機関との連携を模索していくという可能性もある。 ・児童との給食の会食は、児童の成長の様子をうかがうのにより機会だった。
4	〈現状〉 ○校内研修や学年会等を通して、情報交換や勉強会を実施する等、積極的に学ぶ姿勢がある。 ○高学年での教科担任制の実施により、担当教科について、より深く教材研究をすることができている。 〈課題〉 ○教職員の指導力のさらなる向上のため、校内研修体制を組織的で系統的なものにする必要がある。 ○一人ひとりの教職員が担う業務を精選し、教材研究や主体的に学ぶ時間をいかにして確保するかが課題である。	教師自身の主体的で対話的で深い学びの実践	1 年次研修や校内研修等を全教職員で学ぶ場として位置づけ、指導主事や管理職による丁寧な協議や指導をする。 2 全教職員の年 1 回以上の授業公開または研修成果を発表する機会を設定する。 3 外部講師を招聘した研修会を年間 3 回実施し、校内研修を体系化する。 4 学期 1 回、管理職による対話に基づく受講奨励を実施する。 5 会議の効率的な進め方を確認し、時間内に終わらせる。	1 学校評価「主体的な学び」教職員の A 評価を 40%以上にする。（昨年度 19%） 2 教職員の主体的な研究として、一人 1 公開授業による指導を行った。 3 外部講師を招聘した研修会を年間 3 回実施したか。 4 学期 1 回、管理職による対話に基づく受講奨励を実施したか。 5 学校評価「働き方改革」教職員の A 評価を 50%以上にする。（昨年度 40%）	1 学校評価「主体的な学び」教職員 A 評価は 20%で、目標値には届かなかった。 2 全教職員の年 1 回以上の授業公開を行い、管理職や指導主事による指導を行った。 3 校内研修の一環として、外部講師を招聘した研修会を年間 3 回実施した。 4 年度当初と年度末に、管理職による対話に基づく受講奨励を実施した。 5 学校評価「働き方改革」については、時間外在校時間が昨年度比 26.6%減少した。	B	・校内研修が日常の授業実践に結びつくよう、研修テーマや具体的な手立て、研究授業の在り方等を研究し、効果的な研修体制を構築する。 ・外部講師を積極的に招聘し、校内研修を充実させる（年 4 回以上）。 ・全教職員が年 1 回以上授業を公開し、全教職員参加型の校内研修体制を構築する。 ・会議や研修を構造化し、時間内に効率的に進められるよう、時間に対する意識を徹底する。	・在校時間の多さが、教職員の主体的な学びの確保等にも影響しているのではないかと。 ・教員の質は、児童の質、教育の質につながるのではないかと。 ・業務改善などにより生まれた時間を教育の質の向上につなげていってほしい。